

# 特集

## 小児の外科的疾患におけるMRI

*Efficacy of MRI study in pediatric surgical diseases.*

特集を企画するにあたって

藤原利男

獨協医科大学 第一外科

Toshio Fujiwara

Department of Surgery, Dokkyo University, School of Medicine

最近、小児における画像診断技術の進歩には目を見張るものがある。とくにCT、MRIの進歩は素晴らしいものがある。小児の場合、病気に対する診断検査を行う場合、体動、啼鳴等協力を得ることが大変困難なことが多い。また検査による侵襲が大きくなることも患児にとっては大変ストレスとなる。こうした点を考慮するとMRIによる検査は非侵襲的であり、小児医学のなかで特に外科的疾患についてはその情報を得るために大変有効な手段である。

今回、小児外科の分野でMRIがどのように有効であるかについて、4名の先生方に日常臨床での経験を通してその有用性について執筆して戴いた。順天堂大学医学部小児外科の大城清彦先生には先天性胆道拡張症についてMRCPがどの程度胆道と膵管の合流異常を描出することができるか、それが外科的治療にどのように有効であるか、またMRCPの撮影方法を述べて戴いた。小児泌尿器疾患についてはやはり順天堂大学医学部小児科の金子一成先生にMRUについて大変興味ある症例を提示し記述して戴いた。今回仙台で開催された第36回日本小児外科学会総会においてもMRUの有用性について沢山の演題が討論された。造影剤を使用しなくても水腎・水尿管症の情報が得られるこ

とが最大のメリットと言える。特に新生児の場合は腎機能が未熟であることからMRUは極めて有用と考えられる。千葉大学医学部小児外科の幸地克憲先生にはMR-angiographyの3Dについて述べて戴いた。小児では血管造影は御存知のとおり大変難しく、患児にとっても侵襲が大きい検査である。小児外科症例でどの程度現時点で有用であるかを記述して戴いた。熊本大学医学部放射線科の山下康行先生には出生前におけるMRIによる胎児の外科的疾患についてのMRI診断を中心に述べて戴いた。胎児超音波検査の普及により出生前に異常が判明することが多くなった。こうした場合、出生前に外科的疾患の情報が充分に獲得できれば小児外科医は出生前に治療方針を検討することができ、出生直後から治療を開始できる。さらに胎児に対するMRI検査についての安全性は現在なお不明な点が多い。静磁場、変動磁場の胎児への影響、また妊娠のどの時期にMRI検査が安全であるか等についても記述して戴いた。

小児の日常臨床においては検査による侵襲がなく、沢山の情報が得られるのが良い。こうした点では小児外科疾患の診断においてMRI検査は大変有用なものと言える。明日からの臨床現場で大いに役立つものと思う。